

ジェイン・オースティンの読書会

2008(平成20)年2月14日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★



監督・脚本＝ロビン・スウィコード／出演＝キャシー・ベイカー／マリア・ペロ／エミリー・ブラント／エイミー・ブレネマン／ヒュー・ダンシー／マギー・グレイス／リン・レッドグレーヴ／ジミー・スミッツ／マーク・ブルカス／ケヴィン・ゼガーズ（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2007年アメリカ映画／105分）

第3章

内容の面白さは男女を問わず

……アメリカのミドルクラスの女性は3人に1人が「読書会」に参加しているってホント……？ もしそうなら、その知的レベルは相当なもの……？
だって、日本人でジェイン・オースティンの小説を1冊でも読んだことのある人は……？ 6人の主人公たちが6冊の代表作にそれぞれ自分を投影させながら語り合う人生模様は面白いが、さてあなたの理解度と共感度は……？
それは、ひとえにあなたの知的レベルに……？

あなたはジェイン・オースティンを知ってる……？

プレスシートによると、アメリカでは「読書会」が大流行しているらしい。ミドルクラスの女性の3人に1人が参加しているというからすごいもの。もっとも、「美味しい食事と上等なワインやコーヒーを楽しみながら、本について語り合う。たとえば、気楽なホームパーティのようなのだが、前もって指定された本を読み込み、きちんと自分の意見を準備しなければならないという厳しさも要求される」とのことだから、いわば、ちょっと緩やかな文学部のゼミのようなもの……？

しかし、この世知辛い世の中でジェイン・オースティンの6冊の本を1冊ずつ1人が責任者になって読書会を開くというのは、テレビのバラエティー番組にうつつを抜かしている日本の知的好奇心のレベルでは全く考えられないこと……？

ところで、あなたはこの映画に登場するジェイン・オースティンの6冊の長編小説『分別と多感』『自負と偏見』『エマ』『マンズフィールド・パーク』『ノーサンガー・アビー』『説得』を1つでも読んだことがある……？ もっと言えば、あなたは18～

19世紀のイギリスの女流作家ジェイン・オースティンの名前を知ってる……？ またその作品名を1つでも知ってる……？

それを知らなければ、基本的にこの映画の面白さを理解することはムリ。ちなみに、私はジェイン・オースティンの名前と作品『自負と偏見』については、キーラ・ナイトレイ主演の『プライドと偏見』(05年)を観たからよく知っていたが、それ以外の作品は全然知らなかったもの。したがって、この映画についての私の理解はかなり不十分……？

女5人、男1人の主人公たちは……？

この映画の主人公たちは、読書会に集う6人の男女。といっても、男女比は女が5人、男が1人とアンバランス。そのうえ、たった1人の男性グリッグ(ヒュー・ダンシー)は、ホントに一番好きなのはSF小説で、ジェイン・オースティンは初心者……？

オースティンの読書会を思いついたのは、6回の結婚歴を誇り、今は独り者のバーナデット(キャシー・ベイカー)。彼女の持論は「ジェイン・オースティンは人生の最大の解毒剤」で、オースティンをまるで身近な人生の師のように敬愛している女性。読書会を思いついたきっかけは、愛情を注いでいた犬プライディが亡くなったため悲しみに暮れている友人ジョスリン(マリア・ペロ)を励ますため。ちなみに、このジョスリンは恋愛には興味がないと言い放つ独身主義者だ。

他方、母娘が共に参加しているのが、母親シルヴィア(エイミー・ブレネマン)とその娘アレグラ(マギー・グレイス)。シルヴィアは、20年以上連れ添った夫のダニエル(ジミー・スミッツ)から突然「他に好きな人ができた」と宣告されたため大ショック。したがって、読書会で元気づけ励ますターゲットは、いつのまにかジョスリンからシルヴィアに変更……？ とにかくアメリカ人は個性豊かな人間が多いよう(?)で、娘のアレグラもその1人。つまり彼女は、同性愛者であることをオープンにしているという女性だ。

もう1人、バーナデットが見つけた読書会のメンバーは、独自の解釈でオースティンを熱愛するブルーディー(エミリー・ブランド)。彼女は高校のフランス語教師で、趣味の合わない夫ディーン(マーク・ブルカス)より、教え子のトレイ(ケヴィン・ゼガーズ)にときめいているという女性だ。

オースティン漬けの監督ならでは……？

この映画を監督・脚本したのは、1952年生まれ的女性監督ロビン・スウィコード。本作と次回作が続けてオースティンに関する作品となる彼女は、「何年もの間、オースティン漬け」だったとのこと。

この映画は、6人の主人公たちがそれぞれ6つの小説のチューターとなって議論していく中、自然に自分自身を小説に登場する人物に投影させていくことになるところがミソ。したがって、小説についての意見や感想を述べあっているうちに、小説中の言葉が引用されたり、笑い話や皮肉っぽい会話が次々と飛び出してくる。もちろん、スウィコード監督はオースティンの作品をすべて読破したうえでこんな脚本を書いているのだが、オースティンを読んだことがない人には、6人の主人公たちが何をどのように論じているのか、またその議論のポイントは何で、一体何が面白いのか、ほとんど理解できないはず。したがって、オースティンの小説を知らない私は、この映画の興味が半減……？ そうなったのでは、監督の狙いは実現できないことになってしまうが、さて……？

読書会は1回目から波乱含み……？

人間なんて人それぞれ何らかの悩みを抱えているもの。だからこそ、ジェイン・オースティンの小説が面白いし、それに惹かれて6人の男女が読書会に集まっているわけだ。

1回目の読書会のテーマとなった小説は『エマ』。主人公のエマは縁結びが大好きらしい。好きな人がいると宣告した夫のダニエルが恋人とスーパーに買い物に来ているところと鉢合わせになったため落ち込んでいるシルヴィアがそんなテーマに参加したから、シルヴィアはさらに動揺。他方、オースティンを「ジェイン」と呼び、自分の解釈に固執するブルーディーに対して若いアレグラは反発。さて1回目からそんな波乱含みの読書会は今後どうなるのやら……？

2回目は『マンズフィールド・パーク』、3回目は『ノーサンガー・アビー』、4回目は『自負と偏見』、5回目は『分別と多感』、6回目は『説得』がテーマ。しかし、6人の主人公たちが次第に小説について語るより、小説の主人公に自分を重ね合わせて語る傾向が強まっていくと、かなりヤバイのでは……？ ロビン・スウィコード監

督は、丹念にそんな6人の主人公たちの姿を6冊の小説に重ねながら描いていくが……。

最後はハッピーエンド……？

月1度の読書会が6回続く間に、6人の主人公たちにさまざまな変化があらわれたのは当然。その変化は本人そのものの変化もあるが、人間関係とりわけ恋愛模様の展開が興味の的……？

すると当然、6人の中で唯一の男性グリッグが誰と結びつくのが焦点。グリッグは、夫ダニエルとの正式な離婚手続を終えたシルヴィアといい仲に……？ それともソファ選びを口実に初デートをしたジョスリンを選ぶの……？

また、もともと夫よりも教え子のトレイにときめいていたプルーディーは読書会を口実にトレイと会っていたようだが、さてその行方は……？ さらに同性愛を公言している若いアレグラはすぐに恋人ができそうだが、さてそのお相手は……？ あっと驚くのは、スカイダイビングやロッククライミングなどの危険なスポーツが大好きなアレグラがケガで入院したところに駆けつけてきた母親のシルヴィアと父親のダニエルが、「家族っていいものだ」と言い合うシーン。ひょっとして、この2人は娘のケガを契機として復縁……？

まあ、こんなさまざまな人間模様が読書会を重ねる中で生まれてくるわけだが、このような面白い人間の営みをみていると、なるほどジェイン・オースティンの小説はたくさんの人間に幸せを……？

2008(平成20)年2月15日記